# 漆原夏樹展

― 未見の花・惑星（ほし）のかけら －

作品コメント

毎日毎日、大好きなアニメを浴びるように眺める娘の姿は、彼女の世界を構築していく景色の一部でもある。素晴らしい表現物から何を得ているのかはわからないが、いずれ未来を切り拓く為の閃きの源泉になることを願って描いた。

「鳴神の景色」
50P（116.7×80.3㎝）

紙本彩色

2024年

大好きな変形ロボットにその身を重ねて舞い踊る
姿は、偉大な存在に身を委ねることで世界と繋
がって行く神聖な行為を思わせる。
激しく動き乱れる呼吸が、彼をより強く豊かな
景色へ導く息吹になることを願って描いた

「瑞風の景色」
50P（116.7×80.3㎝）
紙本彩色
2024

ある夏の景色を描いた。その時の記憶は漂白されつつも、花が咲き誇るように輝きを増していくように思う。
今触れている水がかつて何処かに流れていた水であるように、
その時の記憶や景色は、日常の水底に佇み身の回りを漂っているように感じる。

「水底の花」50M（72.7×116.7㎝）、紙本彩色、2024年

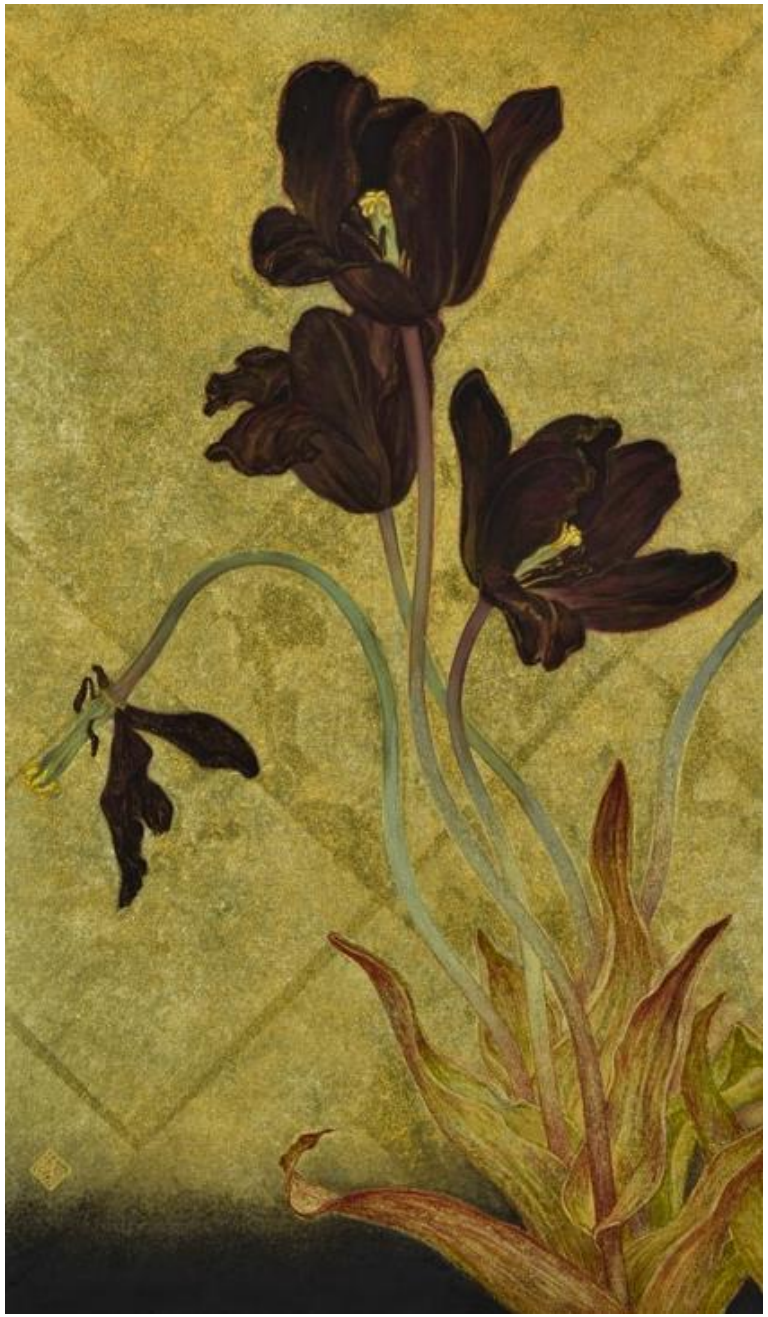
春を待つ気配を描いた
春の気配は全てを祝福するかのような
多幸感に包まれている

そのような情景を
舞い散る花と黄金に輝く少女に託して描いた

「春の声」
8F（45.5×38.0㎝）
紙本彩色
2024年

娘が一瞬取ったポーズがとても美しく、彼女の今を象徴する景色のように見えた。
それはその一瞬でしか現れない奇跡の瞬間でもあり、雄大な景色として結晶化できないかを試みた。

「彼女の風景」
10M（53.0×33.3㎝）
紙本彩色
2024年



散り際のチューリップを描いた。
その花は盛りでは見えなかった雄しべや雌しべが艶かしく露出している。
色が抜けた葉の色と相まって黒と金の対比が鮮やかな容姿は、存在が循環して行く情景のように感じた。

「太極」
6M（41.0×24.2㎝）、紙本彩色、2024年

今年の夏に息子が意気揚々と育てていたスイカが呆気なく枯れた。
泣き崩れる息子に、わりにこれを一緒に育てようと渡した朝顔。
息子は早々に水遣りに飽きたので自分が替わりに育て、久しぶりに朝顔と向き合う夏になった。
つぼみから花が咲き、色褪せ、枯れて実がつくまでを一つの画面におさめ、生命と記憶が巡る夏を象徴する景色として描いた。

「夏の果」
6M（41.0×24.2㎝）、紙本彩色、2024年

雨の中、生垣から一本だけ異様に伸びたツツジを描いた。
本来求められている姿とは違う為、いずれ剪定されてしまうのだろう。そのような事情とは関係なく咲き誇る、生命力の輝きに惹かれて描いた。

「驟雨」
6M（41.0×24.2㎝）、紙本彩色、2024年

紫陽花の英名のHydrangeaは水の器を意味し、梅雨時に咲き誇るこの花の姿は、まさにこの星の水を全身に湛える存在に見えた。星を巡る水のあり方を、星々と白く輝く花の姿に託して描いた。

「夏の果」
6M（41.0×24.2㎝）、紙本彩色、2024年

彼の抱く空想の中の偉大な景色を、
雄大な山々の連なる世界として描いた。

「少年山界図」
3M（27.3×16.0㎝）、紙本彩色、2024年

食卓で厳かに好物に手を伸ばす姿を、水が巡る山水の情景として描いた。

「卓上景観図」
4P（22.0×33.3㎝）、紙本彩色、2024年